

# 法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(37)

トントンカラリ……夏の夜空を見上げると、淡く光った天の川から、織りの音が聞こえてくるような気がします。

七月七日は「七夕」のお祭りです。この夜、働きの者の織姫（織女）と、牛飼いの彦星（牽牛）は、天の川を渡って年に一度の逢瀬を交わします。雨

が降らないように祈りながら、五色の短冊に願い事を書いて、笹竹に飾り付けた日のことが懐かしく思い出されます。

天の川  
扇の風に  
霧晴れて  
空澄み渡る  
鵲の橋

〔拾遺集〕清原元輔



七夕の節句には、竹を用いて邪気を祓う

（天の川の霧は、この扇の風によって吹き晴れて深く澄み渡った空に、鵲の橋がはつきりと見えるよ）

この歌に見える「鵲の橋」とは、天の川にかかる想像上の橋のことです。古来、二つの星が出逢うとき、鵲という鳥が翼を並べて、橋を架け渡すという言い伝えがあります。まさに男女の契りの橋渡しをしていたのでしよう。晴夜に瞬く星の光は、再び巡り逢えた幸せを映し出しているのかも

しれません。

七夕はもともと旧暦の七月七日（新暦では八月上旬）に行われていました。今では主に新暦七月七日の行事となり、それはちようど梅雨時でもあることから、昔よりも晴れる日が少なくなったそうです。ちなみに、前日七月六日に降る雨は、出かけるために牛車を洗う雨といふことで「洗車雨」と呼ばれ、七夕の夜に降る雨は、逢えなかった悲しみに流す涙の雨ということから、「洒涙雨」と呼ばれます。もしも次の八日に雨が降ったら、それは後朝の別れを惜しむ「名残の涙雨」と言えるでしょう。

（病氣などを起す悪い氣）を祓う習わしがありました。清少納言『枕草子』にも、

七月七日は、曇りくらし、夕方は晴れたる空に、月いと明かく、星の数も見えたる。

（『枕草子』）

（七月七日は一日中曇っていて、夕方になってからは晴れた空に、月がとも明るく、星も数えられそうなのに）

（七月七日は、曇りくらし、夕方は晴れたる空に、月いと明かく、星の数も見えたる。）

天の川が見えにくいとは言いますが、季節の変わり目に身を浄めながら、遙か彼方の二人にも思いを馳せていたのでしょうか。

七夕は、お盆（盂蘭盆・旧暦七月十五日前後）の行事とも深く結びついています。七月は「盆月」とも呼ばれ、七月一日は地獄の釜の蓋が開く日と言われます（釜蓋朔日）。この日から亡き人（精霊）がこの世に帰り始めることから、ご先祖様を

## 折り折りの記 (71)

### 夏草やひとさわ茂る曲輪跡

波多野 重雄

高尾山の一路の「城見台」に、北条氏照の八王子城跡を偲ぶ。天正十八年（一五九〇）陰暦六月二十三日前田、上杉約五万勢に落城した。侍大将中山勘解由家範は自刃（四三歳）。家康はその功を惜しみ長男照守、二男吉信を小姓に拔擢。長男は槍奉行、二男を水戸城主頼房の付家老とし、光圀（五歳）を二代目城主に推挙。二万五千石の松岡館主となり、八王子武士十七騎を與力とした。

（高尾山健康登山親睦会々長）

## 七月七日

厚木市 荒井 一雄

### 東南織女星

東南の空に、織女星（姫星）・・・

### 西北牽牛星

西北の空に、牽牛星（彦星）・・・

### 星河清且浅

星河（銀河）は、清く且つ浅し・・・

### 我想幸兩星

我想ふ、幸せな兩星（二人）を・・・

楊貴妃と

玄宗帝も眺めけり

七夕の夜の織女・牽牛

迎える準備を始めます。

七月七日の七夕は、お盆までの折り返し日であることから、「七日盆」と呼ばれます。お墓参りや、盆棚（精霊棚）飾りの用意に取りかかりながら、身のまわりを整え、心の中も浄めていきます。

昨年の「高尾山報」に、お盆は「ご先祖様への『親孝行』であり、これまで育ててくれた親への『恩返し』にもなる」と書きました。お迎えしたご先祖様に「感謝の心」で手を合わせれば、きっと優しく微笑みかけてくださることでしょう。

「親孝行」については、次のような話があります。親が子を思う慈しみの深いことは、父の恩は須弥山（仏教で世界の中心に聳えるという高山）のように高く、母の恩は山を取りまく大海原のように広いと喩えられます。もし、長い間お経を唱えたとしても、父母の恩に達することはできません。母は、私が胎内に宿つ

てからというもの、身を苦しめ、心を尽くして、月を重ね、日を送ります。生まれる時には、桑の弓・蓬の矢を天地四方に放つて立身出世を祈ります。

この身体は父母から受けたものだから、傷つけないようにするのが親孝行の始めとは言うけれど、襦袢に包まれてから今に至るまで、親は昼も夜も心安まることはありません。人の親というものは、我が身の衰えなど気にもかけず、ただただ子の成長を願うのです。

（『曾我物語』）

親は、自分が年齢とともに「老い成る」ことよりも、子供が健やかに「生い育つ」ことに心を配っているのでしょうか。こうした親の温かみは、先祖

（栃木北部教区普濟寺中）

人がこの世で受ける四つの恩（四恩）には、父母の恩も挙げられています。夜空の無数の星々に、ご先祖様の姿を重ねつつ、その「恩」（恵み）の光を受けながら、静かに手を合わせます。

（兎海 『性霊集』）

四恩の広徳に酬いて、三宝の妙道を興さん。

（四恩の大きな徳に感謝して、三宝（仏法僧）の正しい道を歩んでいこう）

代々、途絶えることなく今に受け継がれてきました。私などは、ともすれば自分のことだけで余裕がなくなり、さまざまに恩を忘れることも度々ですが、あらためて深い恵みを噛み締めなければと反省します。

（先月号三ページ中、「折り折りの記」の俳句に出てくる「山毛櫨」という言葉の振り仮名を、「ぶな」と訂正させて頂きます。茲に、謹んでお詫びと訂正を申し上げます。

## お詫びと訂正